

緩和ケア病棟の役割についての巻

当院の緩和ケア病棟はどんな役割を担っているのか。当院は基本的に、いわゆる「急性期病院」であって、すなわち救急車をどんどん受け入れ、どんどん手術をして、ややこしい検査を積極的にするためのところ。地域における基幹病院として、国や県から「地域医療支援病院」「がん診療連携拠点病院」「災害拠点病院」などに指定されています。その中にある緩和ケア病棟です。伝統的なキリスト教系ホスピスなどとは趣が異なります。健康保険制度上の役割は決まっていて、「主として苦痛の緩和を必要とする悪性腫瘍及び後天性免疫不全症候群の患者を入院させ、緩和ケアを行うとともに、外来や在宅への円滑な移行も支援する病棟」と明記されています。

当院の場合はがん拠点病院という性格上、緩和ケア病棟に入院される患者さんはすべて悪性腫瘍すなわちがん患者さんです。そしてほとんどの場合、最期の場面を過ごされるために利用されています。ところで、当院は2021年1月1日に新病院が稼働し、新たな一歩を踏み出しました。将来に向けて、より地域の急性期医療に貢献することが目標となり、特に現在の救急部門を「救命救急センター」に格上げすることが目玉に上げられました。

その一方で、当院の緩和ケア病棟は従来ほぼ慢性期的なケアを専門としてきました。しかし今後は、上に挙げた役割の中でも「外来や在宅への円滑な移行も支援する病棟」という部分に力を入れたいと考えています。急性期の検査・治療の場から、入院療養にこだわらず、患者さんや家族を円滑に地域の医療・介護スタッフへつなぐことを目指します。

これには2つの意味があります。ひとつは、コロナ禍が長引く中で緩和ケア病棟と謂えどもご家族等の面会を強く制限せざるを得ない現実があります。よって在宅療養を提案することで患者さんがご家族等と過ごす機会を選択できるようになること。もう一つは、当院の急患や手術が増えることは必然であり、それらの急性期治療が一段落した後の患者さんが入院したままだと、次の急患や手術患者さんが待たされてしまうという事態を避けること。いずれも当病棟、当診療科だけでどうにかなるものではありません。

しかし、多職種・診療科と連携し、必ずしも緩和ケア病棟を経由せずとも、患者さんにとって最適な療養場所を提供するお手伝いに関与します。当然、在宅中に気が変わって緩和ケア病棟を希望されてもよいような相談もできます。そのような話し合いを早い時期から進める「アドバンス・ケア・プランニング」ないしは「人生会議」への支援も積極的に関与します。こうした立場や取り組みについて先日、院内の発表会で表明したところです。“緩和ケア病棟経由で再び在宅療養”を選択できるよう、進めていきます。